

服従のキスは足にして

K a o r i & T a k a o m i

山内 詠

Ei Yamauchi



エタニティ文庫

目次

服従のキスは足にして

5

書き下ろし番外編 永遠のキスはその爪つめ先に

341

服従のキスは足にして

思わず夜空を見上げて、ため息をつきたくなくなってしまおう。そんな夜だった。

「……星、見えないな」

これが違う場所なら、もっと見えたかな。なんて思った後、苦笑いが浮かんだ。

普段なら夜空を見上げることなんか、ほとんどない。二十八年も生きていけば、わかっている。そこに星があっても、街を包むネオンの輝きに阻まれて、何万光年も向こうで淡く瞬く光など見えるはずがないことくらい。

ただ、わかっているとしても、その見えない光にさえ縋りたい時がある。

今日はそんな日だった。

空しさだとか、やりきれなさだとか、妬ましさだとか、まるで星の見えない夜空のように黒い感情でラッピングされた一日。だけどそれだけじゃなかった。

嬉しさや、安堵や、幸せを祝福する気持ち。それが鮮やかなリボンみたいに掛けられていたから、私、本村香織は辛うじてだけれど、こうして一人で立っていられる。

「じゃ、二番行ってきます。何かあったら電話して」

今日の十五時近くのこと。レジにいるバイトの子に声をかけ、私は職場を後にした。

二番というのは、休憩を表す隠語だ。ちなみに一番はトイレ。

この時間になって、ようやく昼休憩が取れた。いつもなら十四時頃なのだけれど、今日は朝からバタバタしていて、なかなか休めなかったのだ。

「さすがにお腹減ったなあ」

午後からのバイトの子が遅刻して来なければ、もう少し早く休憩できたのに。あの子今月遅刻二回目だから、次にシフトが入っている日は用心しておいた方がいいかも。一応注意はしたけど、不貞腐れていたから、ちょっと心配だ。

雑貨店をチェーン展開する会社に勤めて六年。最初は販売スタッフとして店舗に配属され、一昨年からようやく店舗管理を任されている。当たり前だけれど、それに伴って仕事量はぐんと増えた。

中でも一番頭を悩ませているのはバイトの管理だ。人件費を抑えるために、社員は管理職を含めて一店舗あたり二、三人のみ。営業時間は十時から二十一時までなので、当然社員だけでは回せない。だからバイトの力を借りなきゃいけないのに、無責任な子ども多くて、振り回されてしまうことがしばしばあった。

今いる店舗は管理職としては二店舗目にあたる。最初の店舗は新人時代から勤めていたこともあり、バイトの人たちともそれなりに仲よくやれていたから、大きな苦労はなかった。

だけど、今の店舗は違う。前任の男性店長が複数の女性バイトと色恋沙汰で揉めて、逃げるように辞めたという問題店なのだ。私がやって来たばかりの時は、雰囲気も売上も最低最悪だった。

最近になってようやく月ごとの目標売上をクリアできるほどにまで持ち直したけれど、全てが上手くいっているとは言えない状況に、弱音を吐きたくなることも少なくない。

とはいえ仕事のやりがいと大変さが比例することくらい、わかっている。三十歳を目前にした今、同年代の女性の多くは似たような苦勞をしているのだろう。

いつも行っている店のランチタイムはもう終わってしまったから、軽食が充実しているコーヒーショップに足を向けた。

ここはホットサンドが絶品なのだ。夕方からの仕事に備えて、美味しいものを食べておかなくちゃ。

窓際の席に座って注文を済ませると、自然にため息が漏れた。やだな、思ったより疲れているのかも。最近ホント、忙しいし。

ため息を隠すために口元を手で覆うと、かさついた指先が頬を掠める。検品などで段ボールを触るから、年中手荒れが酷い。ある意味職業病と言えた。

バッグからハンドクリームとネイルオイルを取り出して、念入りに擦り込む。店の人気商品の一つである外国製のハンドクリームは、香りがとつてもよくて気に入っている。まだ店舗でバイトに振り回されている身には遠い夢だけれど、いつかバイヤーになれば、こんな素敵な商品を買いたい。

「今日は残業しないようにしなきゃな」

今夜は大学の友人たちと久しぶりに会う約束をしている。仕事の愚痴も気心の知れた友達となら、笑い話になってくれるはずだ。

ハンドクリームとネイルオイルをバッグに仕舞っていると、テーブルに置いていた携帯が震えた。着信音よりも耳障りな音が響き、慌てて通話ボタンを押す。

「もしもし」

『もしもし、お疲れ』

電話の相手は、付き合って二年になる恋人の健司だった。

「お疲れさま」

『電話出られることは休憩中だよな？ まだ時間ある？』

「あるよ。今休憩入ったばかりだし。どうしたの？」

『いや、近くまで来てから、よければ会いたいなと思って』

「え、本当？」

突然の申し出に少し驚いたけれど、もちろん構わない。

製菓会社の営業をしている健司から、昼間に連絡が来ることは以前からあった。でも、これから会いたいと言われるのは本当に久しぶりだ。

今いる場所を簡単に説明して、電話を切る。

「何だろ、珍しい」

付き合い始めた頃は、今のような誘いがよく来ていた。基本的に平日休みの私と、週末休みの健司。休みがなかなか合わないため、昼休憩の時に二人でランチを取っていたのだ。

驚きが治まると同時に、じんわりと温かい喜びが胸に広がる。

左手の小指にはめたペンキリングを、指の腹でなぞる。健司からの誕生日プレゼントだ。付き合っている人から初めてもらった指輪ということもあって、肌身離さず身につけている。いつしか、こうして何気ない時になぞる癖がついていた。

付き合いが長くなるにつれ、昔みたいに少しの時間をやりくりして会ったりするなんてことは、ほとんどなくなっていた。まあ、お互い当時とは仕事の内容が変わって忙しいのだから、仕方ない。

でも、やっぱりメールや電話じゃなくて直接会えるとなると……嬉しい。

とりあえず、昼食は急いで食べちゃわないと！

すごい勢いで食べ終えたホットサンドの皿を下げてもらっていたら、「いらっしやいませ」という店員さんの声が響いた。視線を入り口に向けると、ちょうど健司が店に入ってきたところだった。

よかった、間に合った！

「悪い、待ったか？」

私を見つけて笑顔で駆け寄ってくる恋人の姿に、とくと胸が鳴った。

健司は一六八センチの私が見上げるくらい背が高い。学生時代はアメフトをしていたという身体は、むっちりとした筋肉がついていて、まるでプロレスラーみたいだ。スポーツマンらしく日に焼けた肌と、男らしい太い眉と、大きな口が特に好き。

もう二年も付き合っているのに、こうして顔を見るたびに好きだなあって思う。ホント、私の好みど真ん中なんかもん。

でも、顔には出さないように気をつけている。健司は恋人に甘えられたりとか、人前でべたべたしたりするのが好きじゃない。だからなるべくクールに振る舞うのが、私にとっては当たり前になっていた。

「ううん、大丈夫。今食べ終わったとこだし」

まあホットサンドは五分で平らげたけど、そんなのは全然苦にならない。

「日中会いたいなんて、珍しいね」

思いがけず、声が弾んだ。

最近では会えたとしても、平日の夜にバタバタと食事をするだけ。こうして昼間にゆくり話ができるのは、いつ以来だろう。

「ああ、うん」

昔を思い出して和んでいた私とは裏腹に、健司はどこか落ち着きがない。お冷を持つてきてくれた店員さんにコーヒートを注文した後も、視線はあっちこちを彷徨っている。こんな彼、今まで見たことない。いつも営業マンらしく堂々としていて、いかにも体育会系ってタイプなのに。

何か問題でもあったのかな。私に頼み事とか？

注文したコーヒーがやってきても、健司はそわそわしたまま。上着のポケットから取り出した煙草たばこに火をつけたはいけれど、一口吸っただけですぐ灰皿に押し付けてしまっ。

「どうしたの？」

「うん、香織にちよつと話があつてさ……」

話があるという割に、健司は口を開きかけては閉じるのを繰り返している。よほど言

いづらいことみたいだ。一体なんだろう？ またお金貸して欲しいとか？ いつもなら

あつげらんと言ってくせに。それとも仕事で失敗でもしたんだろうか。

「話って何？」

私が問いかけてようやく、彼は意を決したように切り出した。

「……あのさ、俺ら付き合って結構経つじゃん」

「そうね、二年ちよつとになるかな」

「ぼちぼち、はつきりさせなきゃいけないと思つてさ……」

付き合つて結構経つたら、はつきりさせなきゃいけないこと？

つて、もしかして！

……プ、プロポーズとか!?

そりゃ、今まで結婚を考えなかったと言えば、嘘になる。お互い今年で二十八歳、適齢期だもの。

けど、まさか昼休憩の時に、何の前触れもなく言われるなんて思わないじゃない!?

「う、うん、そうだね!」

思わず声が上がってしまう。ところが次に健司が発した言葉は、私の予想とは全く違つていた。

「すまん、別れてくれ!」

がばりと音がしそうな勢いで、健司が頭を下げた。

「……はあっ？」

意味が全くわからなくて、間の抜けた一言が口から転がり落ちる。

「もう気付いてるだろうけど、他に好きな子ができた」

す、好きな子って!? 気付いてるも何も、思いつきり初耳ですけど!?

っていうか、ちょっと待て。じゃあ、ここ何ヶ月かメールや電話がめっきり減っていたのも、そのせい?

「っーか、もう付き合ってる」

付き合ってるって、おい! 堂々と二股宣言か!?

すぐさま、週末になかなか会えなかったことに思い至る。平日夜の短いデートも私に合わせてくれているものとばかり思っていたけど、本当は土日以外の女の子のために使いたかったから?

あまりのことに絶句する私に構わず、健司は続ける。さっきまでの迷いが嘘のように、饒舌に。

「お前のことが嫌いになったわけじゃないんだ。ただ、もっと好きな子ができた」

「……はあ」

「あいつは取引先の受付で働いてる……二十歳でさ」

は、はたちって。ちよつとというか……随分若くない?

「すごい小さくて、華奢まろやかっつーか、こう、ぎゅっとしたら折れそうな感じ」

エア彼女を抱き締めるように、健司が自分の腕をクロスさせる。その姿に、思わず乗り出していた上半身を引いてしまった。こんなこと、する人だったっけ?

「そんで、おちちょちよいで失敗ばかりしていて、目が離せないんだ」

そりゃ二十歳だったら人生経験も少ないだろうし、短大卒なら今年就職したばかりだから、失敗はするでしょうね。でも取引先の営業にまで言われるって……よっぽどじゃない?

「寂しがり屋で、いつも会いたいわって言うてるし」

恋人なら、それも付き合いたてなら、どんな女の子だって会いたい会いたい言うでしょうよ。

「会ってる時は、思いつ切り甘えてくれるし」

そこでなぜか、健司は一旦言葉を切った。少し間を置いて「それに」と言った後、ちらりと私を見て気まずげに目を逸らす。

「土日休みだし」

「……は？」

頼んでもいないのに新しい彼女のことを一通り説明した健司は、呆然としている私に

真顔でとどめを刺した。

「お前は仕事だって何だって、上手くやれるだろう？ ……だけどあいつは、俺がいなきや駄目なんだ」

……何その三文小説みたいな台詞。

いつ私が一人で大丈夫だなんて、言っただろう。むしろいつだって、健司に会いたいと思っていた。

だけど私も健司も働いているし、会社ではそれなりに責任ある仕事を任されてもいるから、簡単には会えない。それに何より我儘を言っつて、健司を困らせたくなかった。

寂しいと思っつても、仕事で疲れてる健司のことを考えれば、耐えられた。仕事で嫌なことがあつても、営業先で酷い扱いをされたと悔しがつてた健司の姿を思えば、自分も頑張れた。人前でべたべたされるのが好きじゃないつつ言つていたから、サバけた大人の女でいようと努力した。

本当は、手を繋いで街を歩きたかつたし、二人きりの時にはうんと甘えたかつた。でも健司が、嫌だと言つたから……だから我慢してたのに。健司にはいつも笑つていて欲しくて、負担になんかなりたくなくて！

そう思つた瞬間、怒りが目の前を真っ赤に染めた。握り込んだ手のひらに、さして長くない爪が喰い込む。

この拳を振り上げてやろうか！

だけど口をついて出たのは、諦めにも似た呟きだった。

「……そう」

燃え上がりそうになつた怒りを鎮めたのは、失望。それも、健司に対してのじゃない。自分に対しての失望、だった。

今健司が語つた新しい彼女は、私がなろうと必死に努力してた、彼の理想の女とは正反対だ。つまり私の努力は、ただの独りよがりだったのだ。

年下は趣味じゃないつて、同等に話せる同い年がいんだつて、言つてたよね。自分の身長が高いから、小さい女は首が疲れて面倒だとも。

お互いを尊重して自立できる付き合いがいいとも、言つていたね。甘えられるのは好きじゃないつて。

私が土日休みじゃないことにも、「誰かが休みの日に働かないと世の中は回らないもんだ」つて、納得してくれていたよね。

私が信じていた全てを、今、健司は綺麗さっぱり否定した。

彼は私が会いたいと駄々をこねれば、嬉しかったのだろうか。

我儘を言つて甘えれば、応えてくれた？

多分、無理だ。

二年も付き合っていたら、健司がどういう反応を返してくるかぐくらい、わかってしまう。呆れた顔で「明日も仕事なんだよ」とか「大人なんだから我儘言うなよ」とか言うに決まっている。口調まで想像できてしまうのが、余計に悲しい。

もっと悲しいことに、彼へどんな反応を返せばいいのかも、簡単に導き出せてしまう。接客で鍛えた表情筋は、こんな時でも力を発揮してくれる。私は口角を引き上げて目尻を下げ、無理やり笑顔を作った。

「わかった」

落ち着くために、テーブルに置かれていたお冷をゆつくりと飲む。冷たい水が喉を通り過ぎていく瞬間、ここで泣いたらどうなるだろう、という考えが頭を過った。泣いて絶つたら、健司は考え直してくれるかなって……

だけど、私にはできなかった。

みっともない姿なんて、見せたくなかった。最後まで、綺麗に終わりたい。

「別れましょう」

貼り付けたような笑顔で、一言だけ告げた私に、健司は心底嬉しそうに言った。

「やっぱり香織は話がわかるな！ あいつは何言ってもぐずぐず言うからさ」

よかった、この対応で正解だった。

そう思ったと同時に、失望が絶望へと変わった。

彼の理想通りになろうと努力した私ではなくて、ぐずぐず言う若い女を、健司は選んだ。そのことを、今の健司の言葉で実感してしまったからかもしれない。そして、私は浮気を責めることもせず、別れ話にあつさり納得する女だと思われていたってことも……愚痴や不平不満を言わなかったのは、健司が「そういう面倒な女は嫌いだ」って言うていたからなんだけど、きっと忘れているだろうな。

私が笑った。ただそれだけで、まるで全てを許されたかのごとく健司は話し続ける。なんだろう、取り返しのつかないものを見ているような、そんな気分だ。

「本当は友達に戻りたいんだけど、あいつがうるさいから、連絡とかは勘弁してくれ」

私と健司は共通の友人を通して知り合い、出会ってからひと月くらいで付き合い始めた。戻るも何も友達だったことなんて、あったっけ？

でも、友達という一言で全てが納得できた。

健司が私に求めていたのは、恋人ではなく、女友達だったんだ。友達なら、そりゃ束縛も嫉妬もしないよね。サバサバしている方が付き合いやすいよね。

「……わかったわ。アドレス消しとく」

私としては、親切心からの申し出だった。それに、別れた男と友達になるなんて冗談じゃないし。

なのに、健司は少し傷ついたような顔をして「なんかそれは寂しいなあ」と口を尖ら

せた。

「甘えん坊で寂しがり屋ってことは、確実に嫉妬深いつてことくらい、わからないのかな。そもそも自分でうるさいなんて言っちゃってるくせに。」

もう、たくさんだ。これ以上話を聞きたくなくて、私は最後の言葉を口にした。

「……彼女とお幸せに」

「おう、お前もな」

なんとか絞り出した声にも、震える手にも、健司は気付かない。

彼の中で、私はどこまでも話のわかる大人の女のままなんだろう。誠実な謝罪の言葉は、結局聞けなかった。

健司が去った後、震えが収まるまでしばらく動けなかった。だけど不思議と涙は出ない。

「これで終わり、か……」

恋人に浮気されてふられた時くらい、泣いたつていいだろうに。

そう思った途端、目尻に涙が浮かんできた。けれども、何度か瞬きをして零れ落ちないようにしてしまった。

これからまだ仕事がある。泣き腫らした目で職場に戻るわけにはいかない。そんな気持ち、溢れ出そうになる感情さえも、あつという間に抑え込んだのだ。

……自分の器用さが恨めしい。

健司が残していった煙草の吸殻から、薄く煙が立ち上る。

その煙草が全て灰になるまで眺めた後、席を立った。時刻を確認すると、なんとか休憩時間内に店に戻れそうだった。ということは、健司と話したのはそれほど長い時間じゃないってことか。

別れ話、随分簡単に済まされちゃったな。

そう思うともう、苦笑いしか浮かばない。二年強付き合って、こんなもんか。

新しい彼女について語る健司は、本当に楽しげだった。まさしく、好きで好きで仕方がないって感じで。あんな姿、初めて見た。

私は健司に恋をしていたけれど、健司は違った。

ただ、それだけなんだろう。

左手の小指にはまっていたペンキーリングを外して、ポケットに入れる。いつか薬指に違う指輪をもらえると信じていた自分が、馬鹿みたい。

電話が来た時の高揚した気分は、もう欠片も残っていなかった。冴えた冷たい気持ちが胸の奥に広がっていく。

健司への気持ちに幾重にも重しを載せ、心の湖に沈めてしまおう。

一時しのぎにしかならないとわかっている。だけど、まともに向き合っていたら壊れてしまう。

それは予感じゃなくて、確信だった。

約束の時間に三十分遅れてダイニングバーに駆け込むと、いつものメンバーはすでに揃っていた。

「ごめん、遅れた!」

「お疲れー、料理頼んでおいたよ」

先に始めておいてくれと連絡していたから、テーブルの上にはいくつかの料理が並んでいる。

今日は、大学時代の同期である沙紀と由美子、そして私の合同誕生日会。

三人共同じ月生まれという偶然がきっかけで親しくなったこともあり、社会人になってもこの会は途切れることなく続いている。

逆に言うと、この会以外で会う回数は減っていた。普通に土日・祝日休みの会社に就職した彼女たちと違い、私は土日出勤当たり前の完全シフト制で、休みが合わなくなってきたからだ。

何もかもを共有していた頃とは違うことくらい、お互いに理解できている。だから少しづつ離れていく距離を寂しく思いつつも受け入れて、年に一度だけは、あの頃に戻るのだ。

「仕事お疲れさま! とりあえず飲み物頼も」

由美子から差し出しされたメニューを受け取りながら、もう一度謝る。

「遅れてごめんね。仕事長引いちゃって」

健司との別れ話の影響か、休憩から戻った後、思うように仕事が進まなかったのだ。

普段はやらない失敗ばかりしてしまい、結局予定よりも大分遅くなってしまった。

社会人としてプライベートと仕事をちゃんと区別できてるつもりだったのに、この体たらく……。まだまだ修業が足りないや。

まあいい。今日あったことを二人に聞いてもらおう。きっと彼女たちなら、健司をコテンパンにけなしてくれるだろう。私は悪くないと、言ってくれるだろう。

……そしたらやっと、泣けるかもしれない。

「いって、仕事なら仕方ないじゃない。よつ、本村マネージャー」

沙紀が茶化すように、口の横に手を当てて言う。

「やめてよ、もう」

マネージャーといえば一応管理職だけど、小さな店の中での話だ。人の入れ替わりの激しい業界でこの歳まで辞めずにいれば、いくばくかの残業代と引き換えに肩書をもらえるだけ。

とはいえ、いつもならこんな風に友達から褒められたら、ほんの少し優越感を持つこ

とができた。だけど、今日胸に広がるのは苦い気持ちだけ。

——お前は仕事だって何だって、上手くやれるだろう？

不意に、健司の言葉が耳に蘇る。

仕事って、上手くやるのが当然なんじゃないのかな。失敗すれば自分だけじゃなく、周囲にも会社にも迷惑がかかるのだから。

私は別に器用なわけじゃない。どちらかといえば人より覚えるのに時間がかかる方だと思う。だから他人との差を埋めるために、いつも努力してきた。その努力を全否定するような健司の言い草を思い出して、心が軋む。

——だけどあいつは、俺がいなきや駄目なんだ。

巷に溢れる恋の歌みたいなのに、あなたがいないと生きていけない、とでも言えば健司は満足したのだろうか。相手の都合も考えず、自分の気持ちばかりを優先すればよかったのだろうか。

……やばい。これはかなり気をつけないと、悪酔いしてしまうかもしれない。ちゃんぼんは絶対にやめとこう。

「とりあえず最初はビールかな。二人はどうする？ 一緒に次のお酒頼む？」

もう一杯目をほとんど飲んでしまった様子の二人に、飲み物のメニューを見せたけれど、すでに決まっていたようだった。

「うん、私はシャーリーテンプル」

「私はカシスオレレンジかな」

「沙紀がシャーリーテンプルで、由美子はカシオレね。了解」

呼び出した店員さんにドリンクを注文する。これでさっきまでの話題が変わってくればよかったんだけど、そうもいかなかった。

「すこいよね、香織は。もう管理職だもんね」

沙紀がしみじみと言うもんだから、苦笑してしまった。

「ちよつと何よ。そつちこそ、今度チーフになるとか言ってたじゃない」

頻繁に顔を合わせていなくても、お互いの近況はSNSで大体知っている。確か沙紀はついひと月ほど前に、もしかしたら次の人事で昇進するかも、なんて書き込みをしていたはずだ。

「んー、それ辞退しちゃった」

「何で!？」

あんなに仕事頑張ってたのに。びっくりして問い返すと、なんとなく様子がおかしい。それは沙紀だけじゃなくて、由美子もそわそわしているというか、落ち着かない雰囲気だ。

……なんか、今日似たような見たんですけど。嫌な予感するんですけど。

そんな悪い予感ほど、当たるものだ。

「実はね……今度結婚するの」
 少しでもだけ申し訳なさそうに、沙紀が言う。だけどその声には、隠しきれない喜びが表れていた。

「け、結婚!? ……って、ちょっと待って。」

沙紀には付き合ってから一年になる恋人がいる。でも年下でちょっと頼りないから、結婚は考えられないとか言っていたじゃない!

あまりのことに固まってしまった私と違って、由美子が驚いた声を上げる。

「本当に!? 私もなんだけど!」

「えっ!」

由美子の言葉に、沙紀が目を丸くする。そして、すごい偶然! とばかりに、二人はきやあきやあとはしゃぎ始めた。けれど私はそんな二人を前にして、完全に言葉を失ってしまう。

おめでどうって言わなくちゃ! だけど、声が出てこない……!

「お待たせしましたー」

パニック状態の私を救ってくれたのは、ドリンクを持って来た店員さんだった。「空いたグラスお下げしてよろしいですか?」とにこやかに言われて、ようやく我に返る。

店員さんのおかげで一呼吸置くことができた。仕事で身についた愛想が、ここでも威

力を発揮する。

「二人共おめでどう! さ、乾杯しよ! 二人の結婚を祝して!」

いつもなら『お互いの誕生日を祝って』だけど、今日はこれしかないでしょう。

かんばしい、とグラスを勢いよくかち合わせ、ビールを一口飲む。いつもより苦い気がするけれど、気付かないふりをした。大丈夫、私はいつも通りに振る舞えるはず。

「本当によかったねえ」

動揺を隠すために、わざと大きさに言ってみる。

「ありがと、香織」

私の心情など知りもせず、満面の笑みで応える二人。なぜか申し訳ない気持ちが一気に湧いてきて、思わず私は謝ってしまった。

「でもごめん。正直、すっごくびっくりしちゃった」

素直な気持ちを吐露したら、沙紀が肩を竦めながら「そうだよね」と頷いた。

「自分でも急だなんて思うもん」

「けど結婚するってことは、何か決め手があったんでしょ?」

きつと頼りなかった彼が変わってくれたんだろう。そう思って尋ねたのに、返ってきたのは予想もなかった答え。

「うん……子供、できちゃって」

は!? 子供!?

「やだ! ちよつとアンタ、飲んだら駄目じゃない!」

沙紀が手にしているグラスの中身はカクテルだったはず。妊婦が飲酒なんて洒落しやれにならないよ!

「大丈夫だよ。シャーリーテンプルはノンアルコールだから」

「なんだ。もう、びつくりさせないでよ。でも、ウーロン茶とかの方がいいんじゃないの?」

「ウーロン茶だと、カフェイン気になっちゃうから」

あ、そっか。カフェインというとコーヒーのイメージだけど、お茶にも含まれているんだもんね。飲み物ひとつとっても気を遣わなきゃいけないんだ。

「体調は大丈夫なの? つわりとかは?」

「もう落ち着いたよ」

「ならよかつた。……仕事はどうするの?」

子供ができたなら、産休とか育休とか取らなくちゃいけないかならず。今までの彼女の頑張りさえ思えば、昇進を断るだけでも辛かつただろうに、長期の休みを取ることになるなんて……

ところが、沙紀は満面の笑みであつけらかんと言った。

「もちろん辞めるよ。彼が子供もお前もちゃんと養やつてやる! つて言ってくれたんだあ」

沙紀の彼氏は優しいけれど、優柔不断でヘタレだと聞いていた。そんな彼氏がビシッと言ってくれたのが、よほど嬉しいんだろう。いつもの彼女からは考えられない、蕩よろけるような笑顔に面喰らう。

あんなに頑張っていた仕事も、子供と旦那の前じゃ形無かたなしつてことかな。

「じゃ、じゃあ何も心配ないね! なんにせよ、おめでとう!」

「ありがとう!」

色々あったにせよ、好きな相手と結婚できるんだから、いいことだよな。

「もう一回乾杯しよ!」

由美子がグラスを掲かげて見せる。

「そうだね、ダブルでめでたいんだし」

二人同時に結婚だからダブルにしたのだけれど、由美子は沙紀を見て「いや、トリプルでしょ」と言った。そうか、妊娠も喜ぶべきことだもんね。

かんばしい、と、また勢いよくグラスを合わせる。

「まさか、由美子も子供できたなんて言わないよね?」

ノンアルコールでないカシスオレンジを注文していたから、妊娠はないだろうけど、

つい疑うようなことを言ってしまった。

「違うよー！ 彼の転勤が決まってる。ついてきて欲しいって言われたんだ」

由美子は今の彼氏と大学時代から付き合っているの、相手は私も知っている。確か、交際期間はもう五年以上になるはずだ。

仲はいいけれど長すぎる春のせいで、結婚するきっかけを失ってしまったような二人だった。転勤はそのいいきっかけになったのだろう。

「ふうーん、お互い年貢の納め時ってやつか」

沙紀が納得したとばかりに頷くと、由美子は照れながらも、「まあ、そんなとこ」と嬉しそうに頬を緩める。

やっぱり女からすれば、結婚って特別だね。好きな人と一生一緒にいてもいいって、独占してもいいって、法律で保障されるんだもんね。……駄目だ、考え方が卑屈になっちゃってる。

「で、どこへ転勤なの？」

ついて来てくれと言われるくらいだから、それなりに遠方なのだろう。

「北海道」

ところが予想以上に遠い地名が返ってきて、驚いてしまった。

「北海道!? 遠いね」

沙紀もびつくりしたようだ。そんな私たちの反応を見て、由美子の顔に苦笑いが浮かぶ。「うん……多分、もうこっちは帰って来られないと思う」

「どうして？」

由美子の彼の勤め先は私も知っているけれど、本社はこちらのはずだ。ならば、いずれ戻ってくることもあるんじゃないのかな。

「彼の実家が北海道で、元々ずっと地元で働きたいって、転属願い出してたんだって。だからよっぽどのがないと、本社には戻されないとと思うよ」

なるほど、希望してのUターンなのか。それなら納得だ。

「由美子の仕事は、いつまで？」

北海道に引越すのなら、当然辞めなければならぬだろう。

「あと二ヶ月で辞める予定。そこでさ、香織にちょっとお願いがあるんだけど……」

「何？」

「急なんだけど、二ヶ月後に結婚式することになっちゃって」

「二ヶ月後って、もしかして転勤に合わせて？」

「そう。式の次の日に新婚旅行がてら北海道行って、そのまま永住ってことになりそう」

「いや、それ新婚旅行とは言わないでしょ」

そんなのただの移動じゃないか。

「引越して、落ち着いてから向こうでもいいんじゃない？ 実家がそっちってことは、彼の親戚も北海道にいるんでしょ？」

沙紀の当然の疑問に、由美子は僅かに顔を曇らせながら答えた。

「それも考えたんだけど、私は親戚友達みーんな関東だからね。それに彼の友達や会社の人もほとんどこっちの人だし。とても全員分の交通費なんて負担できないよ。だからなんとか彼の親を説得して、こっちでさせてもらうことになったの。……そのせいで、かなりの強行スケジュールになっちゃったわけ」

なるほど、と沙紀と頷き合う。こっちから北海道へ行くとなると、確実に全員飛行機だ。せめて車で行ける範囲だったらバスをチャーターするって手も使えなくはないけど、海に向こうだもんなあ。

「で、私にお願いって何？ 結婚式に関係すること？」

「香織の店、結婚式の引き出物とかもやってたよね。今からでも何とかなる？」

ウチの会社はウエディング関係には結構力を入れていて、引き出物に向けた食器だとか鍋だとかを色々揃えているし、カタログギフトも複数取り扱っている。物によっては社員割引を使えることもあって、友達からプチギフトなんかを頼まれることは今まで何度もあった。

「なるなる。二ヶ月あるなら全然問題ないよ」

実際、できちゃった結婚で急に式を挙げる人は今時珍しくない。けど、私の関わった式は最短でも三ヶ月は余裕があった。二ヶ月だと記録更新しちゃうな。

「あと、もうひとつお願い！ 二次会の幹事も、お願いします！」

「えっ!？」

幹事なんて、軽々しく請け負えない。というのも、以前引き受けて大変な目にあったのだ。

その時の新婦も同じ大学の友達だったけれど、頭の中がお花畑になってるんじゃないかってくらいに浮かれっぷりで、散々振り回された。それは由美子も知っているはず。「披露宴はほとんど親族のみになっちゃうから、会社の人とか友達とかは二次会に呼びたいんだ。方々当たってみたものの、急すぎてみんな駄目で……忙しいのはわかってるんだけど、もう香織しか頼める人いなくて」

そう言うなり、由美子はちらりと沙紀に視線を向ける。

どうやら式の引き出物は私に、二次会の幹事は沙紀に頼もうと思っていたみたいだ。つわりが落ち着いたということは安定期に入っているんだろうけど、さすがに幹事は頼めないよね。

「……仕方ないなあ、後で詳しいことメールして」

私しか頼める人がいない、なんて言われちゃったら、断れないじゃない。……本当な

ら結婚式の二次会の幹事なんて、今一番やりたくないことだけど。

「ありがとう！ ホント助かる！ やっぱり香織は頼りになるわー」
やっぱりって言葉が、少しだけ引つかかる。

「香織は仕切るの上手いからね」

沙紀が他人事のように口にした言葉が、さらに心をざわつかせた。

……昔から、いつもこうだった。

友達や恋人は、私がいわゆる、姉御肌^{おねごはだ}、ってやつだと思っている。頼りがいがある、仕切るのが上手くて、世話を焼くのが好きなのだ。

みんなが喜んでくれるからと、今まで色んなことを受け入れてきた。嫌なわけじゃないけれど、それが特別好きってわけでもないんだけどな。

でもそんなこと、この場で言えるはずもなく、笑顔で激励の言葉を口にするしかない。「まあ結婚式の準備って大変だもんね。身体に気をつけて頑張りなよ！」

「身体よりも精神的にヤバイよー。結婚前なのに喧嘩ばかり。仕事の引き継ぎもしなきゃいけないのにな」

大きさにため息をついた由美子の声には、嬉しさが滲み出ている。その弾んだ声色が、ちりっと私の心を引き搔いた。

そこから話題は、彼女たちの結婚話へと完全に切り替わった。

「ねえねえ、由美子のプロポーズはどんな感じだったの？」

沙紀が興味津々な様子で質問する。

「普通に彼の家で『結婚しようか』って言われただけだよ」

「指輪はもらったの？」

「うん、その時にもらった」

「ええー、いいなあ。ウチ、婚約指輪まだもらってないよ」

沙紀がまだ何もはまっていない左手を眺めて、唇を尖らせる。ところが、由美子は少しだけ不満げに続けた。

「でも指輪は、できれば二人で一緒に選びたかったなーとか思っちゃって」

「ああ、それはあるね」

結婚を控えた二人の幸せそうな会話に、眩暈^{めまい}がする。

……どう考えても「今日、二年付き合っていた恋人にふられました」なんて報告できる雰囲気じゃない。だから私は、ひたすら聞き役に徹した。

その間、自分が上手く笑えているかどうか気がなくなって仕方がなかった。頬は引き攣^{ひきつ}っていないだろうか。目尻はちゃんと下がっているだろうか。楽しそうな声を出せているだろうか……

そんな私の様子に、彼女たちは全く気付かない。惚気^{おろけ}と自慢の合間に、愚痴と不安を

織り込みながら続く会話に、どんだん心がすり減っていく。

私と彼女たちの悩みの次元は、決定的に違ってしまった。

再び心からわかり合えるようになる日は、私が結婚するまで来ないだろう。

それを理解したと同時に、猛烈な寂しさに襲われた。

ふと目に入った手が小刻みに震えているのがわかった。表情は取り繕^{つくろ}えても、身体は上手くないらしい。

震える手を隠すために、両手を握りしめた。その時、左手の小指に微かな違和感を覚える。

それは、指輪の跡だった。

一年以上同じ場所にはめ続けていたせいで、そこだけがくぼんでしまっているのだ。

それは、これから新しい指輪をはめる彼女たちと私の違いを象徴しているように思えた。

心の奥底に沈めたはずの悲しみが、浮き上がってくる。ごぼりと湧き上がった大きな泡が、静かに水を湛^たえていた湖の水面を揺らす。

駄目だ、今は駄目だ。耐えなくちゃ。

必死に気を張っていたせいか、正直、その後の記憶は曖昧^{あいまい}だ。

結局、いつもより随分早く、誕生日会はお開きになった。

二人はまだまだ話したい雰囲気だったけれど「妊婦を遅くまで付き合わせちゃ駄目でしょ」と、私が強引に終わらせたのだ。

会計を終えて店の前で別れる時、由美子は幸せいっぱい笑顔で言った。

「次は香織の番だね」

それは今日一番、笑顔を試された瞬間だった。

「私みたいに、順番間違えないようにしなよー」

沙紀がとどめを刺してくる。何も知らないって、なんて残酷なんだろう。

「うん……そう、だね」

私はどうにか笑顔を作った。これほど接客業に就いてよかったと思つたことはない。

二人と別れ、駅に向かって歩き出した足は、ずっしりと重い。

幸せを掴んだ彼女たちの姿はあまりにも眩^{まぶ}しすぎて、見るのが辛かった。

だけどそう思ってしまうのは、私の状態が悪いせい。彼女たちは何にも悪くない。

……そう自分に言い聞かせても、無性に寂しかった。

学生から社会人になった時、私たちは変わった。だけどみんな同じタイミン^グだったから、差など感じなかった。

でも今は違う。

結婚できる女と結婚できない女。

勝ち負けじゃないけれど、あからさまに差ができてしまった。変わって行く彼女たちと、変わらない自分。比べても仕方がないってわかっているのに、比べてしまう。私だけが置いて行かれる。そう思った途端、猛烈な喪失感そうしつかんに襲われ、思わず身を守るように二の腕を抱き締めた。

「……言えなかったな」

今日恋人と別れただなんて、言えるわけがなかった。それも二股をかけられた末に、捨てられただなんて。

羨ましい。ずるい。どうして彼女たちだけ？

そんな気持ちが全くないと言ったら、嘘になる。

だけどそれ以上に、彼女たちの幸せを祈る気持ちも、もちろんあるのだ。

「おめでとう、よかったね」と口にしたのだから、嘘じゃない。

彼女たちだって、これまで理不尽な仕事に耐え、恋に傷つき、それでも一生懸命にやってきた。長年積み上げてきた思い出が、一緒に過ごした時間が、それを証明している。

沙紀の頼りないと思っていた彼氏が、そうじゃなくてよかった。きっかけは引越しても、由美子ややととプロポーズされてよかった。そうでしょう？

頬を撫でる風に促うながされて、俯うつむいていた顔を上げた。そして思い切り息を吸い込み、大きく吐き出す。深呼吸したつもりだったのに、大きなため息にしかならなかった。視線の先には星も見えない、真つ暗な夜空。

こうやって空を見上げているのは、涙を零こぼしたくないからじゃない。見上げていなければ、視線が地面に固定されてしまい、もう前を向くことすらできなくなる気がするからだ。

私はまだ大丈夫。

一人でも、きつと大丈夫。

人生をサイコロで進むゲームにたとえたら、今私に悪い目が出ているだけ。

誰にだって、いい時と悪い時があるもの。

今日人生が終わるわけじゃない。途中で悪いことがあっても、あがつてナンボ、でしよう！

「大丈夫」

目に見えない星に願いをかけるように、そつと呟つぶやく。

その声は思ったよりもしっかりと耳に響いて、少しだけほつとする。だから視線を空からゆっくり下ろして、私は歩き始めた。

週末の夜の繁華街を歩く人は、皆楽しそうに笑い合っている。その中でも大学生くらの女の子の集団に目が留まった。

カフエラテ色のふわふわヘアに、シフォンのスカート、パステルカラーのツインニット、胸元にはハート形のペンダント。華奢なヒールでゆったりと歩いていく。チークなのかお酒のせいなのか、ふんわりピンクに染まった頬が可愛い。

小さくて華奢で甘えん坊な二十歳。きつと健司の新しい彼女は、こんな子なんだろう。その女の子たちを見つめる私は、細身のパンツにレザージャケットを合わせ、長い黒髪を一つに束ねている。目を引くものといえば、耳元で揺れる大ぶりのシャンデリアピアスクらい。服装に合わせてメイクもシンプル。

装いも雰囲気も、あの子たちとは本当に正反対だ。

自分が好きでしている格好だし、それなりに似合っているとも思う。

「……私もあんな格好、してたらよかったのか」

後悔が、どうしようもない咬ぎに変わって口から転がり落ちた。

それがぎりぎりのところで踏ん張っていた感情の堤防を、壊してしまったのかもしれない。

——心の湖に沈めた思いが、溢れ出しそうになる。

駄目だ！ 泣くなら家に帰ってから！

明日は久しぶりの土曜休みだから、仕事のことにも気にしなくていい。自分だけの空間に逃げ込んだら、布団をかぶって思い切り泣けばいい。

ところが身体は正直で、心とは裏腹に足がぴたりと止まってしまふ。

どうにかして、やりすごさなきゃ。

ぐっと歯を食いしばり、前を向く。

その時、ふとコンビニの前で煙草を吸っているサラリーマンが目に入った。煙のせいか、少し不機嫌そうに眉を寄せている。煙を大きく吐き出す様子は、まるで大きなため息をついているみたいだ。

煙草を吸っていれば、ため息をついていても、辛そうでも、おかしく見えないかもしれない。

そんなことが思い浮かんで、ふらふらと吸い寄せられるように自動販売機に近づいた。とはいえ吸ったことがないので、銘柄など当然わからない。小銭を入れて適当なボタンを押したら、自動販売機から「タスポをタッチしてください」という音声がかかる。そうだ、今はICカードがなければ買えないんだった。

「……ちっ！」

思わず舌打ちしてしまった、その時。背後から声をかけられた。

「お貸ししましょうか」

「えっ？」

振り向くと、灰皿の前で煙草を吸っていた人が、こちらにICカードを差し出している。

「忘れたんでしよう?」

「あ、すみません」

その人が慣れた様子でカードを自動販売機にかざすと、ガコンと大きな音を立てて煙草が自動販売機から出てきた。

パッケージをむしり取って一本啜^{くち}えたところで、私はあることに気付く。

ライターがない。

反射的にポケットやバッグを探ってしまったけれど、入っているはずがない。

「……ああ、もう!」

思い通りにいかないイライラをつい口に出してしまつたら、今度は目の前に火のついたオイルライターが差し出された。

「どうぞ」

先程 IC カードを貸してくれた人だった。その顔には苦笑いが浮かんでいる。

「……ありがとうございます」

厚意を無下にすることも申し訳ない気がして、火を借りた。見ず知らずの人に迷惑をかけて、何してるんだらう私。

煙草に火がついたと同時に、口の中にふわっとメンソールの香りが広がる。それに誘われるがままに、勢いよく吸い込んだら――

「ぐえっ、げほっ、げほっ!」

盛大にむせてしまった。

あまりにも苦しくて、目尻に涙が浮かぶ。

「大丈夫ですか?」

「だいっ、じょうぶ、です……げほっ」

そう言ったものの、咳が収まっても喉のいがらっぽさは、なかなかなくなるならない。

――人生最悪の日って、今日みたいな日のことを言うんだらう。

まだ火がついたままの煙草を、灰皿に投げ込む。思いつきで行動して失敗するなんて、馬鹿みたい。

早く帰ろう。帰って存分に泣こう。そう思って踵を返す。

「あの」

IC カードと火を貸してくれた人から、唐突に話しかけられた。

「はい?」

「よければ少し……お話しできませんでしょうか?」

お話して……ナンパ? それとも何かの勧誘?

どっちも勘弁して!

「何? 宗教ならお断りします」

今神様だの天国だの語られてもね、全く信じられませんから。冷たく言い放った私に、その男はくすりと笑うと楽しそうに言った。

「宗教でも自己啓発セミナーのご案内でもありませんよ」

「じゃあ何ですか？」

「あなたがとても魅力的だったのです、ちょっとお話しできないかなと思っただけです」

「……失礼だけど、あなた視力いくつ？」

若い頃ならともかく、私は今年で二十八歳になる。ナンパされるような年齢じゃないというか、誘われたらホイホイついていく女に見られたという事実に苛つくんですけど。ところが男からの返答は、全く予想外のものだった。

「両目共に二・〇です。ばっちりしっかり見えています」

「はあ!？」

至極真面目に言い切られて、呆氣にとられてしまう。……そういうこと言ってるんじゃない!

「どうでしょう? ほんの少しだけで構いません。お茶でも飲みながら、いかがですか?」

男はにこやかな表情を崩さないまま言い募る。胡散臭さを漂わせてはいるものの、ナンパ野郎と言ってしまうほど軽くは見えない。チャラチャラしていないというか、真

面目というか。

改めて男の姿をじっくり見てみる。

額が見えるほど短く切られた髪や、目尻にくしゃりと寄る皺から、そこまで若いという感じはしない。年齢は三十代前半ってところか。背は高いけれど、あまり威圧感を感じないのは、きつと全体的に細身だからだろう。

整った顔立ちに、つるりとして血色のいい肌、三日月のように弧を描く薄い唇、そして優しく細められた瞳。大抵の女性は好ましいと思うんじゃないだろうか。ま、私はタイプじゃないけど。

スーツも量販店で売られている安物じゃなく、きちんとした仕立て物っぽい。胸元には洒落たラペルピンが光っているし、胸ポケットからはネクタイと色を合わせたチーフがさりげなく覗いている。袖口から覗く時計も、誰でも知っているブランドの品だ。

外見から判断するに、わざわざナンパなんてするほど女性に不自由しているとは思えなかった。

けれど、どうにも胡散臭い。私がじろじろと値踏みするような視線を向けても、男は笑顔のまま。それが胡散臭さを倍増させている。

だってほら、細められた瞳の奥の感情が読めない。もしかして、普段の私の笑顔もこんな風なのかな。

心のこもったものではなくて、ただ筋肉を動かしただけの、笑顔。買ったばかりの煙草たばこの箱が、ぐしゃりと手の中で潰れる。

ああ、もうどうでもいいや。

そんな気分になったから、潰れた煙草をゴミ箱に投げ込んで、小さく答えた。

「……いいわよ」

どうせ、本日付でフリーになりましたからね。

お話しするだけって言われたって、本当にそれだけで済むなんて思っていない。

私は今夜、この男とセックスするんだらう。

見ず知らずの相手とするなんて、今までの私だったら考えられない。でも、私は二股かけられて捨てられる程度の女なんだし、もう大事にするほどの価値なんてなくなりました。むしろ、こういうナンパ男がお似合いなんじゃない？

最後に健司と抱き合ったのはいつだろう。すぐに思い出せなくらい前だ。なら記憶をさっさと上書きしてしまおう。その相手が誰だって、構うものか。

「ありがとうございます！ では、どうぞ」

男が嬉しそうに手で示した所には、車が止まっていた。コロンとした形が特徴的な、外国産の小型車。

車の助手席のドアを開けてくれたから、そのまま乗り込む。ドアが優しく閉められる

と、外の喧噪けんそうから切り離されて静寂が訪れた。これでもう、後戻りはできない。

男が車のエンジンをかけながら、問いかけてくる。

「もう、お食事は済まされましたか？」

「……まあ」

「じゃあ、どこかお茶ができる場所へ移動しましょうか。時間的にファミレスかコーヒーショップになってしまいますが」

時刻は午後十一時を過ぎたところだ。こんな時間から、本当にお茶をするつもりなの？

「……飲みには行かないんですか？」

普通は酒じゃないのかと思って尋ねると、男は困ったように笑い、「車なもので」と言った。

「ああ、失礼」

自分も乗っているのに、飲酒運転を勧めるようなことを言っちゃ駄目だわ。

「いえ、あなたが飲みたいのであれば、お付き合いますよ。代行を頼むこともできますし」

「……いいわ。もう散々飲んできたから、お茶で結構」

「承知しました」

そう言われたとき、車内に沈黙が落ちる。

お話がしたいとか言いながら、そっちから話題も振ってこないの？　なんか居心地悪いんですけど。

「だけど私からべらべら話しかけるのも癪だ。だからそのままむっつり黙り込んでいると、車はやがて、国道沿いにあるファミレスの駐車場に停まった。

「てつきりホテルに直行かと思っていた私は、思わず「本当にここでもいいの？」なんて聞拔けなことを言ってしまった。

「申し訳ありません。もう少し早い時間であれば、もっといい店があったんですが」心底申し訳なさそうに言う、男の態度にイラつとする。いや、そういうことじゃないくて！

「あなた、別に私とお茶飲みたいわけじゃないでしょう!？」

「と、言いますと?？」

「そこまで女に言わせるわけ!?　あなたいくつよ!？」

「三十五です」

「しれつと答えられて、ますますイライラする。三十五なんていい歳のくせに、しかも女をナンパしておきながら、何もわかってない風な口きくんじゃないわよ！」

ああもう、面倒くさい!

「もっと他に、やりたいことがあるんじゃないの!？」

「もはや苛立ちを隠さず叫んだ私に、男は目を見開いた。ところが、すぐさま同じ笑顔に戻る。……いや、これまでとは少し様子が違っていた。

「はい、あります!」

「まるで宝物を見つけたとでも言わんばかりのキラキラした目で私を見つめてくる。それと同時に、さっきまでの胡散臭さが一気に吹っ飛んだ。な、なんなの、この男!？」

「あまりの変わり様に、今度は私が驚いていると、男はシートベルトを外してこちらに向き直った。そして満面の笑みで信じられない一言を放つ。

「僕を思いっきり罵って欲しいんです!」

「……はあ!？」

「とにかく何でもいいんです。思いつく限りの罵詈雑言を浴びせてください!　お願いします!」

「の、ののしるって……どういうこと!？」

「もちろんお礼はします!」

「バツカじゃないのお!？」

「反射的に飛び出した言葉に、男はさらに目を輝かせた。

「そうです!　そんな感じでお願います!　もっと激しくても全く問題ないです!」

こ、この人、一体なんなの!？」

「お願いします！ 思いつきり、容赦なく！」
男の勢いに押されて、私は思いつくまま罵りの言葉を口にする。

「ば、馬鹿」

「はいっ」

「アホ」

「はいっ」

「マスケ」

「はいっ」

「す、すつとごどついで」

「はいっ」

「あんぼんたんっ」

「はいっ」

「っ……っ！」

男の相槌が間隙なく次の言葉を催促してくるものだから、まるでわんこそばでも食べているような奇妙な焦りに襲われる。だけど赤の他人を罵る言葉なんて、そう次々とは浮かんでこない。

「……終わりですか？」

言葉に詰まった私を見て、男は残念そうに眉を下げた。その芝居じみた表情、なぜかものすごく腹が立つ！

「そ、そんなに簡単にぼんぼん出てこないわよ！」

「そうですねえ」

男は至極当然のように頷くと、今度はきりつと表情を引き締めて言った。

「では、こちらから言葉を指定しますので、それを言って頂くといいのはいかがですか？」

「指定？」

「そうですねえ、『この薄汚い変態が！』とか、『愚か者め！』とかはどうでしょう」

「……あなた、頭大丈夫？」

どん引きしながら言うと、男は「それぞれ、そういう感じでお願います！」とやたら嬉しそうにした。普通こんな風に言われたら、腹が立つと思うんだけど……

これが変態ってやつなのかしら。一瞬呆れてしまいそうになったけれど、悪酔いしてしまつたせいかな、自暴自棄になつていふからか、目の前の男を思いきり虐げてやろうという暗い気持ち、むくむくと湧いてきた。

……お望み通り、徹底的にやっつてやろうじゃないの！

ちようどいいことに、今日の私には誰かを気遣う余裕など、これっぽっちもない。

「こんの薄汚い変態がっ！」

立ち読みサンプル はここまで